

「あんた、家を出たさうやないか」

「はあ」

と、度胆を抜かれて、どきまぎした。

「どつつあんがえらう心配しとるがな。早う帰るがええ」

そこへ選ばれて来たアイスクリームを、二人はだまつて食べた。

「帰り難い風やつたら、話はつけたげるさかい、帰つたらええ」

「よう決心して出たもんや。二度と帰る気はあらへんわ」

と、泰子はきつく言つた。

「あかん、あかん。そないにきつう言うても、直ぐと後悔することになるんやぜ」

「私、部落に帰るのはごない、しても厭やわ」

「さうや。あんたの言ひ分、一度聞かしてんか。そいで、あんたの言ふのが正しい思うたら、何も言はんと、あんたの言ひなりにまかしとこ」

さう言はれても、泰子はまだ頭なりに折れなかつた。

「旦那はんの気持ちにはよう分るのやけど……」

と、言葉尻を演じて、黙つて仕舞つた。親分はふと思ひついたやうにして、

「うん、さうや。こないなところは話にくかるさかい、家へ行こ。そしてゆつくりと相談したら、どうや」

「そないして、お手数かけてもあきまへんわ」

「まあ、ええわ。あんじようええやうに考へたげる。まかしておくがええ」

そとへ出ると、四條の駅前からハイヤーを拾つて、七條新地に近い図越の家まで乗りつけた。門燈の出た格子戸を開けると

「おかへりやす」

三下の鉄が玄關に顔を出した。

「お客はんや、二階へ案内してんか」

「へえ」

泰子は鉄の案内で、直ぐと二階座敷へ通された。

部落者には図越一家の息がかゝつていた。朴根昌は特に親分と親しいつながりがあつて、泰子はこれまでにもつけ届けの物を持つて、幾度か訪ねて来たことはあつたが、二階座敷へ通るのは今夜が初めてだつた。

風がよく吹き込んで、座敷障子の裾を翻つていた。

「かたくならんと、楽にいたらええ」

親分が現はれて言つた。

「尊やと、芳を嫌うての家出やさうやないか」

「ちがひまんが……」

「こらあかん。別にわけがあるのんか」

「芳はんでなうても、部落んちでかたづけのが、厭で厭でならんのどつせ」

「怪体なこといふのんやな」

と、驚きの顔を見張つた。

「考へても見やはいな。一度結婚に失敗した私どすさかい、なにもかもよう分つてまんね。部落者はいつまでも部落者で、いつも浮ぶことがあらへんわ」

「そないなこと言うて、ほんなら、ごないする了簡や」

「なんでもええで、部落者だけ止めとこ思ひますねん。そのためにはパンパンでもかまへんで、ひとり食べんなんら思ふとるのどつせ」

「なんや阿呆らしい。そないなこと言はん

とおき。部落者のどこにひけ目を覚えるんや」

「ほんなら、聞きまひよ。世間では、部落者にえゝ顔せんやおへんか」

親分は初めて大声に笑ひ出した。

「なるほどな。部落者よりペン助の方がましかいな」

その時、遠く踏段を踏んで、誰かが上つて来た。意気込んだ男の音が、

「親分、柳原に事件が出来ましたえ」

「なんや。はつきり言うてんか」

「土地の若い者が、デカとぶつかつたというてまつせ」

「ふう、ほんなら、ほつたらかいてもおけんわ」

親分は屹つと腹を据えて言つた。

五

「ドブロクは柳原に限るといふもんや」

「ほんまや。なあ、姐はん。これからは毎日出向いて飲まして貰ふさかい。ようサービスしてんか」

「白鳥」の酒場で、葉ツ葉服の二人づれば

腹を落ち付けて、飲み呆けていた。

「こちらはん、トウ雪はんわ。初めて見えて、もうてんこ。替うていやはる」

と、小夜子がぞつぽく言つた。

「まあまあ、姐はんを狙うて来やういうてんのやあらへん。ドブロクがあてや。安心しいな」

となり合はせの席に、きつかけを待つて

いた土地の若者が、この時ついと身をひるがへすと、薬みを利かせて言つた。

「よう、ドブロクのながあてや。聞かしてんか」

なにかたゞならぬ空気が漲つた。

入口に芳太郎と新一とが立ち寄がるのを見ると、小夜子は急迫した事態を感じて、

そつと奥へ退つて仕舞つた。

目に見えない殺氣、それは死を直感した刹那、誰にでも鋭敏に感じられるものだつた。

葉ツ葉服の二人も、この異常な形勢を知つて、ぞつとした。正に戦闘態勢を整へて、立ち上らうとした瞬間、

「警察のスパイ奴ツ！」

裏んで見せた男が罵声を放つた。

相手は虎口を脱する態勢をとりうとしたが、不覚にも酔ひ過ぎていた。身体が硬は

つて自由を欠いた。身を脱す隙もなかつた。

ビール瓶が年輩な一人の脳天で碎けた。

よろよろと二三歩よろめいて倒れた。

若い方の葉ツ葉服が、突如にビートルを取り出して、相手を狙つた。

ダーンと一発。

それで相手は崩折れるやうに、がつくりと板をつくくと、前のめりに倒れた。

それを視野に入れて、表へ飛び出さうとした瞬間、横合からはつしとばかり、一升瓶がその脳天を打つた。

頭が榴榴のやうに口刺れして、顔面に血潮が滝のやうに流れた。そしてそのまへのけそつた。

一瞬間に三つの屍体が転がった酒場の中は、血を見て一層猛り出した連中は、どつと戸外へなだれ出ると、部落の入口にある交番へ向つて殺倒していつた。

不意の襲撃に、交番詰の巡査が対抗する餘裕はなかつた。無数の投石がガラスを破つた。そして暴徒の数は後から後から増し

て行つた。彼等はなにか訳の分らない言葉
を口々に叫んで、猛り狂つた果ては、巡査
を血祭りに上げて仕舞つた。

凶悪親分が息を聞いて楨庄に乗り出した
時は、既に遅かつた。全部落は部落の生命
線としてドロク密造所を築るために、青
年を糾合して取起した後だつた。

闇現に燃え、殺氣を孕んだ人間の集団
は、実に無氣味で恐ろしい破壊力を持つて
いた。暴徒の集団とこれに対峙する警官隊
とが、部落の入口付近で激突したのは十時
過ぎだつた。

せり合ひの喧声は怒号となり、やがて叫
喚となつた。叫び、殴り、倒れ、そして警
官隊は前進を焦慮し、暴徒は武器をとつて
反抗した。

一分隊の警官は、七条大橋詰から加茂川
堤に沿つて、部落内へ鋭角を作つて突入し
た。そこにもまた血の雨が降り、血の虹が
架り、幾人もの人々が愛憎のやうに額へ蹴
落されていた。どこやらで銃声があつた。
それがきつかけで激闘は一層激しくなつ
た。

恰度自動車レースのやうに、証けつけて

来る各新聞社の連中は、その血闘の中を証
け廻り、叫喚を續つて何本かのフラッシュ
を放いた。救護の警官隊は次々と現場に到
達して、益々凄惨の氣をあふるばかりだつ
た。

雨を呼ぶらしく、東山を越して吹きつけ
る風は、次第に強くなりままつた。加茂川
の川波も、爬虫類の音のやうに戦慄にそ
よいで、ざらざらと異様に光つて見えた。

部落が叫喚に埋まり、流血の乱闘に混乱
する時、部落の一部に火の手があつた。そ
れを見ると、警官隊は一挙に発火点へ押し
て行つた。

発火点は朴根昌の住宅だつた。ドロク
密造の証拠隠滅を図つての放火だつた。こ
ゝにも荒々しい土足が踏み込んで来て、も
の凄しい乱闘が視けられた。

警官隊が住宅裏の密造所へ突入した。そ
して火焔の中から続々と証拠物件を選び出
したが、その間、断續的に引火したアルコ
ール分の爆発が起つて、作業は困難を極め
た。

暴徒たちはまた大挙して逆襲して来た。
そこゝに乱闘の人影が火燄に躍つて明滅
した。

乱闘激刻の後、数十名の検束者を出して、
暴徒の隠匿が楨庄された時、部落には墓場
のやうな静寂が来た。そして、生温い風
が大粒の雨を伴つて、強く吹きつけて来た
朴根昌の住宅の焼け跡はまたくすぶつて
いた。焼け落ちた残骸から、細い煙が幾条
も立ち昇つていた。

警備の警官もまだ配置されず、現場はそ
のままに放置されていた。

泰子はこの変り果てた焼土に立ちつくし
て、なにもものへともない憎悪の念に駆りた
てられるのを覚えた。

六

暴徒の騒擾が楨庄された後に、烈風を交
へて、車軸をも流さんばかりの豪雨が襲来
した。この豪雨は朝になつても熄む形勢は
なく、加茂川は刻々と増水し濁流の渦を巻
いて流れた。

この豪雨に傷害跡の血痕はあとかたもな
く洗ひ流されて仕舞つたものゝ、部落の人
達の怒りはまだ心頭に燃えていた。部落者
の間には不安と動揺があつて、一層猜疑
的にそして孤立的になつて、部落外の者に
敵愾心を募らせていた。

過激な分子の間には、長老の制止をも聞き入れずに、検束者の毒盪を策する向きもあり、死を決して銃砲火薬類を密かに動かして、再挙決戦を挑まうとする向きもあつてなほ危険を孕んだまゝ、爆発への空気が上昇しつゝあつた。

さうした間にも、警察阻止の布令は次々と発せられ、僅かに歌謡して事なきを得てゐる状態だつたが、今朝は凶越親分の肝入りで、小学校に部落の有力者を緊急招集し、事餘の円満解決と善後処置について、碎心協談を續けていた。

その時分、豪雨を犯して、部落側の負傷者を軒別に手当して廻る篤志の医師があつた。鹿谷浩一が自発的に博愛の精神を露顯した巡回だつた。レインコートの襟を立て、洋傘を傾けて雨を避けながら、次の患者を探して来る途中で、

「止れッ！」

突然、立ち現はれた数名の壮漢に、前後を取り囲まれた。

「警察の者やう」

「とんでもない。僕は医者ですよ」

「そないなこと嘘や。柳原へは一切立入り

禁止の管やないか」

「負傷者を手当して廻つてゐるんです。清水新道に開業している鹿谷です。決して警察の者ぢやありませんよ」

はつきり身分を打ち明かされて、壮漢どもは氣勢を殺がれ、些かたじろぐ風だつたが、なかの一人がやをら進み出ると言つた。

「ほんなら此奴や。朴はんよこの純子をたぶらかして、始終、四条やたら新京極やたらほつき歩くちう女証しの男や」

「道理で、のつべりとした面やないか。芳はんよこの納屋につれていて、斬く牛の頭でも抱かして置くがえッぜ」

どつと哄笑が壯漢どもの間に湧いた。殺氣立つて習性を喪失した彼等は、この勸諭を無批判に容れて、一人の浩一を遮り無二引き立てゝ行つた。落部の娘に手出しをしたといふ青年の嫉妬が、無法な腕力を行使させたのだ。そして浩一は芳太郎の

処の納屋の中へ幽閉されて仕舞つた。しかし、浩一にしてみれば、何故に幽閉されたのか、理由が皆目解らなかつた。

扉を閉めた納屋の中は、むんむんと蒸せ

る思ひがした。昨日の騒物は始末もつかず、片隅に蠅の跣。梁に委され切つていて異臭が鼻を衝いた。この先がどうなるのかも見當がつかかねた。不安な気分だつた。

雨は豪勢に降り止まなかつた。亜鉛葺きの屋根のことゝて、耳も聳せんばかりに喧しい。雨足の露音だつた。

小学校の緊急協議会では甲論、乙駁、敷時間を要した挙句、当局へ陳情書を提出することゝなり、どうやらそれが起草される段取りにまでとり運んだ。起草委員が別室に移つて、文案を練る間、休憩となつた。その時、誰からともなく、教員室での話だと、加茂川が危険水位を突破したさうだと一座に報告された。

やがて草案が出来て、溝場一致可決決定した時には、堤防決壊の恐れがあり、塩小路橋が大分危険は瀕した状態にあるといふ報告に接した。一座はまた新しい災禍を前にして動揺した。

陳情委員たちが凶越親分の案内で、市警本部へ出頭すると、署長は河川の増水に備へて、非常態勢を指令するところだつた。



「ガード下の低地は、床上浸水を始めたんだぜ。落ち着いて、君たちの陳情を聞いても居られまいぢやないか」

署長は凛然として言ひ放つた。陳情委員たちは頷る綱もない気持ちがあった。

「こんな場合やで、署長はんの言やはずところももつともや。どうや、陳情書だけでも受け取つて貰うて置いて、何れこの出水の騒ぎが落ち着いてから、改めてお願ひに出るのがええやないか」

と、函越親分が口を挟んだ。

そこで、委員たちも加首覬覦の結果、代表者が言つた。

「なにもかも旦那はんにおまかせするさかい、あんじようええやうに頼まっせ」

「宜し、わしが引き受けまひよ。なあ、署長はん、こないに並べて来やはつたのは、みんな部落の顔役や。陳情書だけなと受け取つて貰うて、あとは何分稔便な話をつけたいのや」

「分りました。出来るだけのことは考慮しませう。何分委細のことを話している餘裕がない、今の場合です」

「そらええな。そこまで腹を割つてお呉れ

やしたんえ。これで引き取りまんがな。こらおほきに」

圖越親分は署長の前に低く頭を下げた。

七

昨夜の騒動に危く検挙の手を逃れた芳太郎と新一とは、部落の乾物屋李子膏の奥の間に潜伏していた。品番の後の疲労にくつすり寝込んで、目が覚めたのは午後も大分遅かった。

「よう眠つたやないか」

「ほんまや。えらい降りやな。降り通しと見える」

「こないに降られると、昨夜から持ち越した品番の頭を圧へられて、せうむない」

「そやけど、ルビコンを渡つて仕舞うたんや。この先、どないするねん」

と、新一は今更のやうに芳太郎の顔を覗いた。

「東京へいて暫く息を抜くのや。心配することあらへん」

「一緒につれていて呉れやはるか」

「あたりまへや。万事心得ているさかい、大船に乗つたつもりでいて結構や」

芳太郎の脳裡には、一昨日偶然に訪ねて来た東京二子玉川の金圭運伯母の処へ、落ち延びることを考へていた。それは素直な着想だった。

一旦落ち延びて、落ち着いたら、人夫をしてもどうにかやつて行く自信はあつた。

心配なのは、母親一人を置き去りにすることだったが、部落の青年連盟で面倒を見て呉れるに相違はないと思つた。芳太郎はたと逃亡の経路に就いて考へればよかつた。

唐突に、部落の半鐘が鳴り出した。

既に旗持つ二人は愕然として、顔を見合せた。

「なんやろ」

「手入れやおへんか」

「まさか」

廊下に聲音がして、誰やらが近づいて来る氣配がした。二人の神経はすつかりこの聲音の方にひきつけられて、動悸が高く波打つたのだつた。

廊下に姿を見せたのは、腰から下をぶぶ濡れに濡らした泰子だつた。これは誠に予想外のことだつた。

「寄せて貰うても宜しおますか」

と、泰子は廊下に立つたまゝで言つた。

「かまへんがな」

「えらいことやつたな」

泰子は芳太郎にずんがりと言つた。

「あんたはん、驚いたでつしやろ」

と、芳太郎が訊ねた。

「そないに驚きもしまへんがな」

「いつ帰つて来やはつたんか」

「昨夜戻つたのどすえ」

「家が焼けてしても、小父はん、どこにないしていやはるねん？」

「私は知らへん」

と、泰子は静かに打ち消して答へた。

「へえ、家族の安否を探していやはらへんのか」

「外に探す人があつたんやで」

「ほら、誰や」

「まあ、誰でもえいこと。言はんとこ。私はな、随分えらいこと方々で聞いて、こゝを探り当てて来たんやわ」

「そら、なんでや」

「あんたはんにひと言ひたいことがおましたさかい。なあ、へ、芳はん、どない考へて堤へはいきはらへんのえ」

「堤へ？」

「さうや、しんねりむつりしている場合やおへんがな。あんたはん、堤の切れるのを知らん顔に見送るのは、どないしたんや」

「そないなこと、なにも知らへん」

「あんたは卑怯や。半備が鳴つたやろ。昨夜部落が可愛うて立ち上つた人やつたら、今こそ堤へいて働く時やおへんか」

加茂川の堤が切れる。泰子の言葉が芳太郎の肺腑をえぐつた。

「うん、ほんまや。泰子はん、よう知らしてくれやはつた」

芳太郎は新一と堤へ駆けつけることにして、戸外へ出た。横なぐりの大雨が頬に痛かつた。道路は腰を没する態に冠水して仕舞つていた。

常には暗く川千島に顔音もやさしい加茂川の水も、今はその形相を一変し、濁々とした濁水が轟々と猛り狂つて流れていた。

七条大橋の交通は遮断され、東海道本線の鉄橋も既に危険に瀕していたし、塩小路橋は冠水して仕舞つていた。しかも堤防を越えた濁水は、滔々として部落地帯へ流れ

込んでいた。

部落の人たちは、決死で塩小路橋の上に立つて、流木が橋脚に衝突するのを防いだり、土俵を運んで堤防の上に積み上げたり懸命な活躍をつづけていた。

堤防が決潰すれば、全部落は全滅する。そしてその危険が刻々に増大する。昨夜は敵味方となつて対峙した警官隊も、今日は部落を守つて活動し、避難民の誘導と収容とに大奮だつた。

塩小路橋はいよいよ危険になつた。その橋上に立つて、芳太郎はたゞ一人、流木の激突するのを防いでいた。

「ほ、危い、危い。引つ返せッ」

誰かど見兼ねて叫んだ瞬間、橋桁が浮いて大きく傾斜した。そして、虚空に差し上げた手が目撃者の視界に残つただけで、芳太郎の姿は塩小路橋諸共、水中に消えて仕舞つていた。

八

三日降り続いた豪雨が降り息むと、次第に加茂川の水勢は衰へた。

崇高な芳太郎の犠牲は、全部落の人たち

に感銘を身へ、老若男女の区別なく、協力一致して努力した結果が、漸く水腫から部落を救ふことが出来た。

しかし部落は大半が床上浸水して、数日はまだ水底に没していた。そして完全に水が退いた時に、部落は泥土に埋まつて、置るところに鼻を聞く腥臭が充満した。小路の軒下やガード下などは、恰度塵埃を棄て固めたやうな淤泥のなかにあつた。

豪雨の後に、初夏の暑気が急激に訪れると、部落はいよいよ潮濕なものに見えたが果たして数日後、悪疫が発生し、物凄く勢で蔓延し始めた。

赤痢、腸チフス。僅かの間に部落は感傷の砦と化して仕舞つた。

市の衛生班が動員されて、不眠不休の活躍をしたが、水腫に代つた腐蝕は狂蹶を極めて、病痾に陥れる人の数は増大するばかりだつた。

遂に外部との一切の交通が遮断され、小学校に部落防疫対策本部が設置された。部落全住民の糖漿診断が強請され、十数名の医員が手分けして、軒並みに巡回して診察した。その医員たちにまじつて、浩一の妻

が見られた。

さて、一旦、芳太郎の納屋に幽閉された浩一が、どうして無事で居られたのか。今回の事件にとつては、蛇足と思はれる小さな挿話に過ぎなかつたが、これこそは実にこのセミドックユメンタリーの肝要なポイントとなるものだったのだ。

幽閉されて数刻後、外から納屋の戸が開けられた。

「さあ、出て来なはれ。もう大事おへんさかい。」

老婦人の声だった。

白の朝鮮服が目に著くはつきりと見え、

浩一は漸く救はれて出た。

「ひよんな目に逢うたもんえな」

「お蔭で助かりました。突然ぶち込まれたんで、なにがなにやら訳が分らないんです」

「警察の人や思うたんと違ひまつしやろか許してお呉れやす」

「部落の人たちは、いやに神経過敏になっているんです。間違はれたのなら、それは私の不運です。本当にまらいい目に会ひまし

た」

「どこまで帰りはるんえ」

「潜水新道です」

「ほんなら、近うおすな。堤が切れさうや言うて部落の中は大騒ぎやで、今の間に早う帰らはるがえ、わ」

「へ、そりや大変です」

既に塵先の大門が閉ざされてあつたので、老婦人は浩一を案内して一度母屋に入り、屋内の通路を抜けて、店先から戸外へ送り出さうと思つたらしかつた。

浩一が老婦人に従つて、薄暗い屋内に足を踏み入れると、大騒の臭ひがつかんと臭つた。

突然、座敷の方から高い朝鮮語で話しかけられた。目を移すと、もう一人の老婦人が浩一の方をちつと睨めていたが、なにやら早口に話すと、通路に立つたのが吃驚して、二言三言二人の間で話し合つていた。

そして、座敷の方が浩一の側へ寄つて来て、丁寧に挨拶をした。

「先だつては済みませんでした」

気がついてみると、一昨日、警官に伴れ

られて来た行路病者の老婦人だった。

「おや、あなたでしたか」

浩一はこの輪廻にたい然とした。善根の無駄でなかつたことを、現実に経験したのだつた。

助け出して呉れたのは芳太郎の母親だったし、助けて上げた行路病者は金圭蓮伯母だったのだ。

この経験は、更に浩一に善に対する信念を植えつけずには置かなかつた。

部落のために、人種を超越した人道のために、浩一をしてなにものをも顧みず、医療班で活躍を続けさせる結果となつた。

また、かうした火急の場合だつたから、部落の娘たちは看護班を組織して医療班に協力し、青年たちは清掃班に奉仕した。

そこには部落を挙げて、博愛精神の集結だけがあつた。

昨日、浩一が所属看護班の一人に懇願されて、その妹を採用し参加させる許諾を身へて置いたが、今朝、本部一階の医員室に姉妹揃つて顔を出したのを見ると、妹といふのは純子だつた。

「おや、あなたですか」

「お手伝させて下さいますか？」

「有難う。やつて下さい。」

と、浩一は純子の手を執つて、かたく握つた。

やがて看護班の控室へ戻つて来ると、泰子が言つた。

「なあ、え、純子はん、あんたたちはいつでも幸福でいて欲しいわ」

「姉はんかて、早う幸福にならんとあきまへんえ」

「ま、厭いやらし。芳はんが死なはつたんやで私にはもう好きな人ちうやうなもんあらへんえ」

と、たと淋しい笑ひを見せた泰子だつた。

—(終)—